15f

ぴょん太堂。

15f

15 frame & femme

～昔のスケッチブックから～

スケッチブック、
皆さんは持っておられますか？
持っているとして、幾冊くらい？
ちなみに、何に使われるスケッチブック？
スクラップ帳、メモ代わり、それともやはり、
貴方も絵を描かれる用途にて？
スケッチブック、
それは甘美な響きを持つ、
何処か特別な、
一種の魔法。
初めて与えられた幼少期の頃の感触を、
今も忘れず蘇らせてくれる、予兆を孕んだ一冊 ——。
この「作品集」に収めたものは、
１９９２年から１９９８年にスケッチブックに描いた作品、
その抜粋です。１０代から２０代へ掛けた頃の、
稚拙だけれど思うがままな、息吹、を、
感じていただければ幸いです。
原寸は 27.2×35.4cm（F5）と 25×35cm の二種類。
取り込みはＡ４サイズスキャナ使用の為、
分割してＰＣ上にて合体させております。
お見苦しい点には何卒ご容赦を……。

15f

~ menu ~

"love cinema" f1-f5

「映画好き」 page.5 ～ 12

"lady's" f6-f14

「或る女性」 page.13 ～ 23

"aphrodite" f15

「誰なんだろう？ 心揺らす貴女」 page.25

"column" #1-4

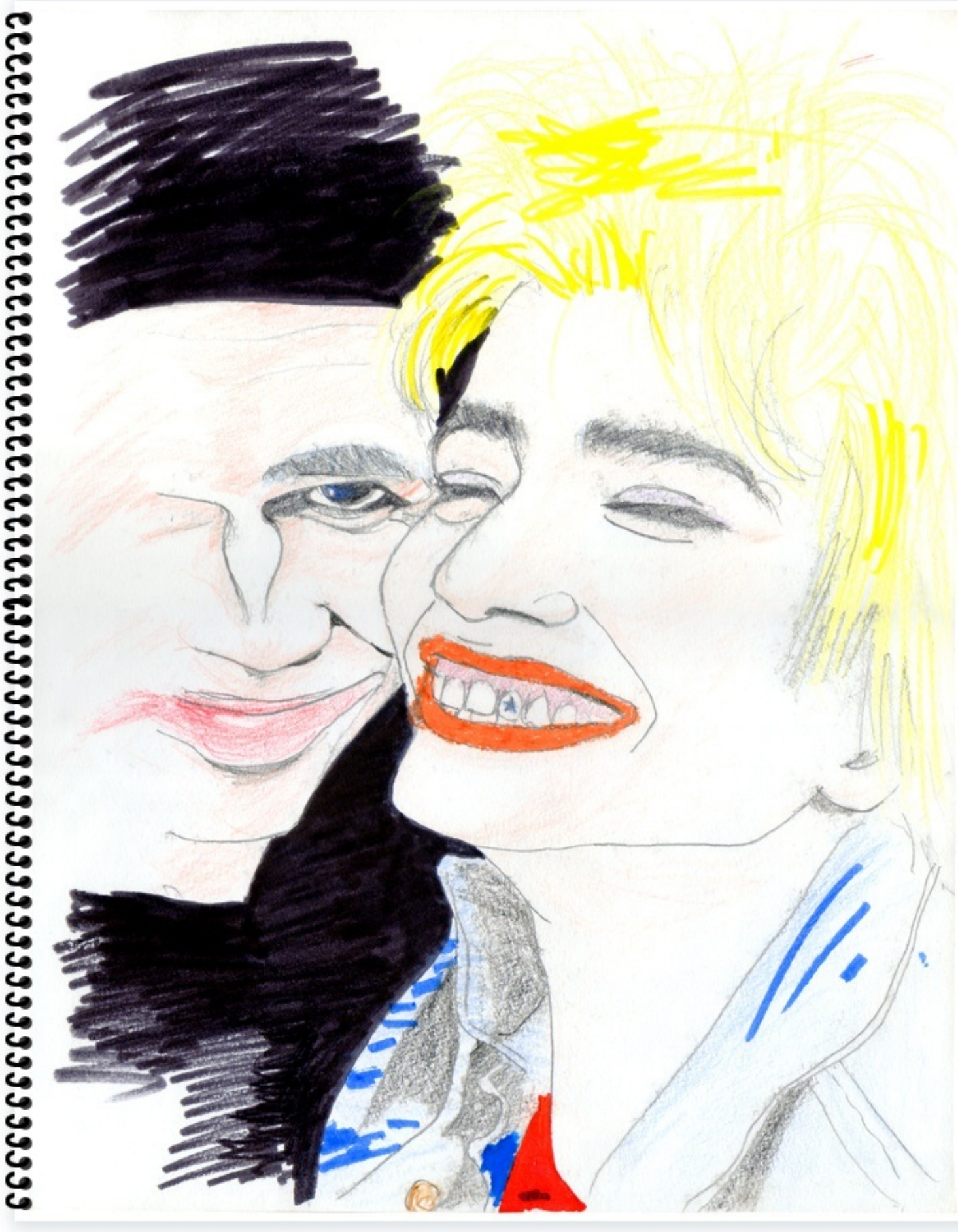
コラム page.7,11,14,24

afterword.

後書き page.27

おしながき

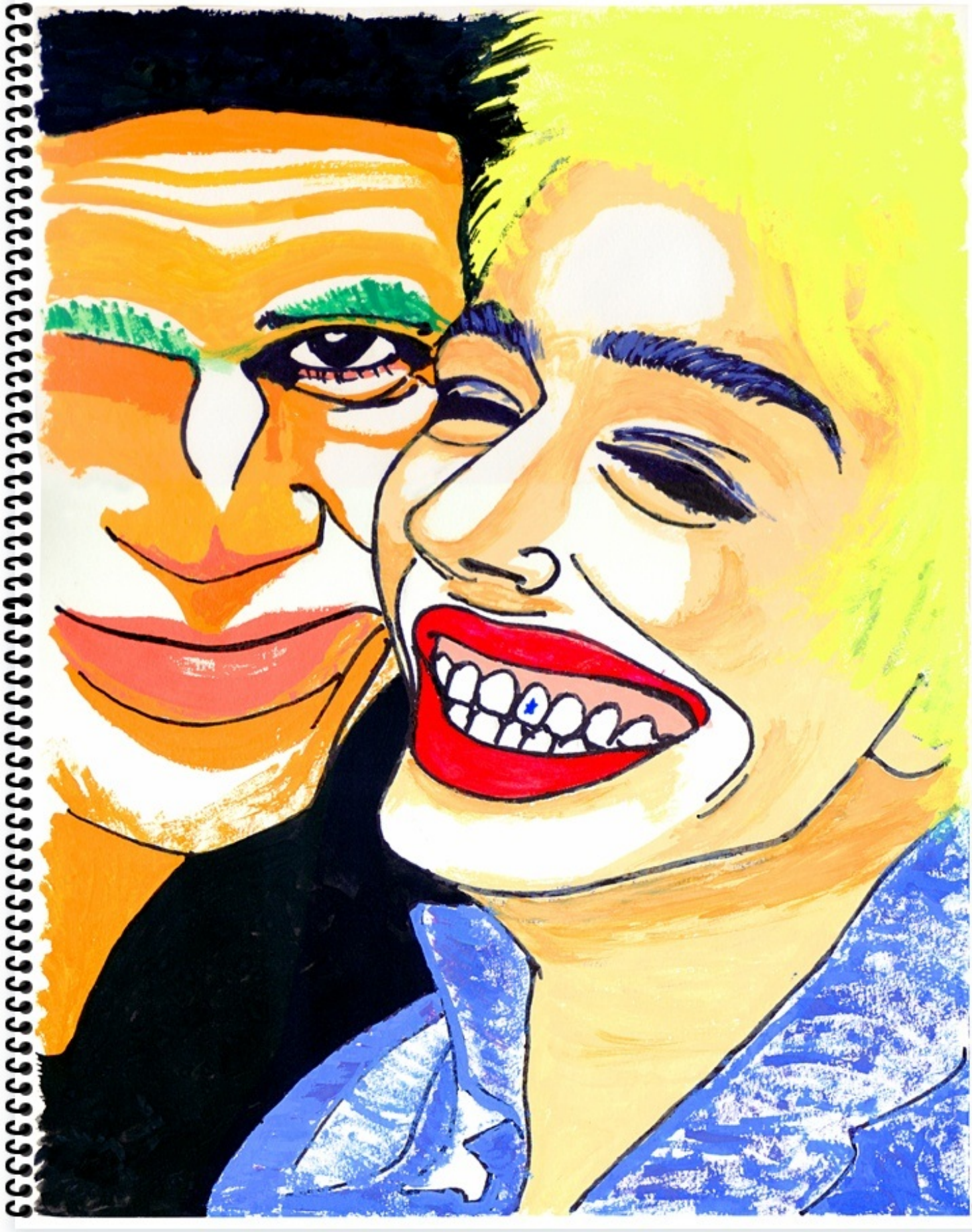
映画好き



「サム・サフィ」　水性マーカー、色鉛筆　1992 年 11 月 2 日制作

「映画好き」と銘打った章でありながら、
実のところここに登場するのはたった二作品でして（笑）。
当時も今も映画館で観ることをこだわりとし、
観たいと思う作品のみを観賞するもので、
観ない時には１年以上も映画館へ足を運ばない、
なんてこともありますが、それでも本数は観ている方だと、
詰まらない自負だけは抱いております。
この作品集に収録した絵を描いていた当時は週に一本、
多い時には週に二、三本の映画を観ていたと記憶しています。
興味の幅も広かったのでしょうが、当時の自分にとって、
それほどに価値のある映画が多かったのでしょう。
そんな自分が初めて映画館で映画を観たのはいつだろうか？ と、
これを書きながらふと思い返したりする訳ですが、
当然ながらはっきりとしたことは判りません。
自分の場合、そもそも母親が映画好きで、
それも映画館で観ることを信条としている人であり、
小さい頃からよく連れられていたことの影響も大きいのではと。
物心ついた頃には、映画館はごく身近な存在であり、
そして自分にとってごくごく当たり前の存在でもあった。
気づけばいつもそこに映画館があった――。
大袈裟でなくそんなことを思う現在の自分です。

コラム「皆さんはいつ頃から映画館へ行き始めましたか？」



「サム・サフィ」　アクリル　1993 年 4 月 21 日制作

「ナイト・オン・ザ・プラネット」　ロットリング、色鉛筆　1993 年 9 月 2 日制作

「ベアトリス・ダル」　筆、色鉛筆　1993 年 9 月 19 日制作

ここに収録した絵を描いていた当時、
邦画もハリウッド大作もまんべんなく観ていたものですが、
とりわけ好きだったのがヨーロッパの映画でした。
既に記憶はぼんやりとしていて、
手元にあるパンフレットの数々だけが、
自分がそれらを観に行ったのだと告げているのですが、
内容については、今、思い出したりは出来ないようです。
ただざっくりとした感想だけが記憶に留まっている。
そんな次第なので、ならば文章にすべきではないのですが、
でもやはり、何か書いてはおきたい（苦笑）。
『ベティ・ブルー インテグラル』を劇場で観て初めて知った
ベアトリス・ダルのこと、そしてフランス映画『サムサフィ』。
自分のスケッチブックに複数回登場した映画作品モチーフって、
この２つだけなのですね。余程印象的だったのでしょう。
ベアトリス・ダルはジム・ジャームッシュ監督作品
『ナイト・オン・ザ・プラネット』でも強烈な印象を残しました。
この作品は当時大ファンだったウィノナ・ライダーお目当てで
劇場に足を運んだのですが、
白目を向いたベアトリス・ダルの印象の方が深く刻まれています。
どれもお薦めの作品なので、是非観ていただきたいですね。

コラム「フランス映画とベアトリス・ダルと」

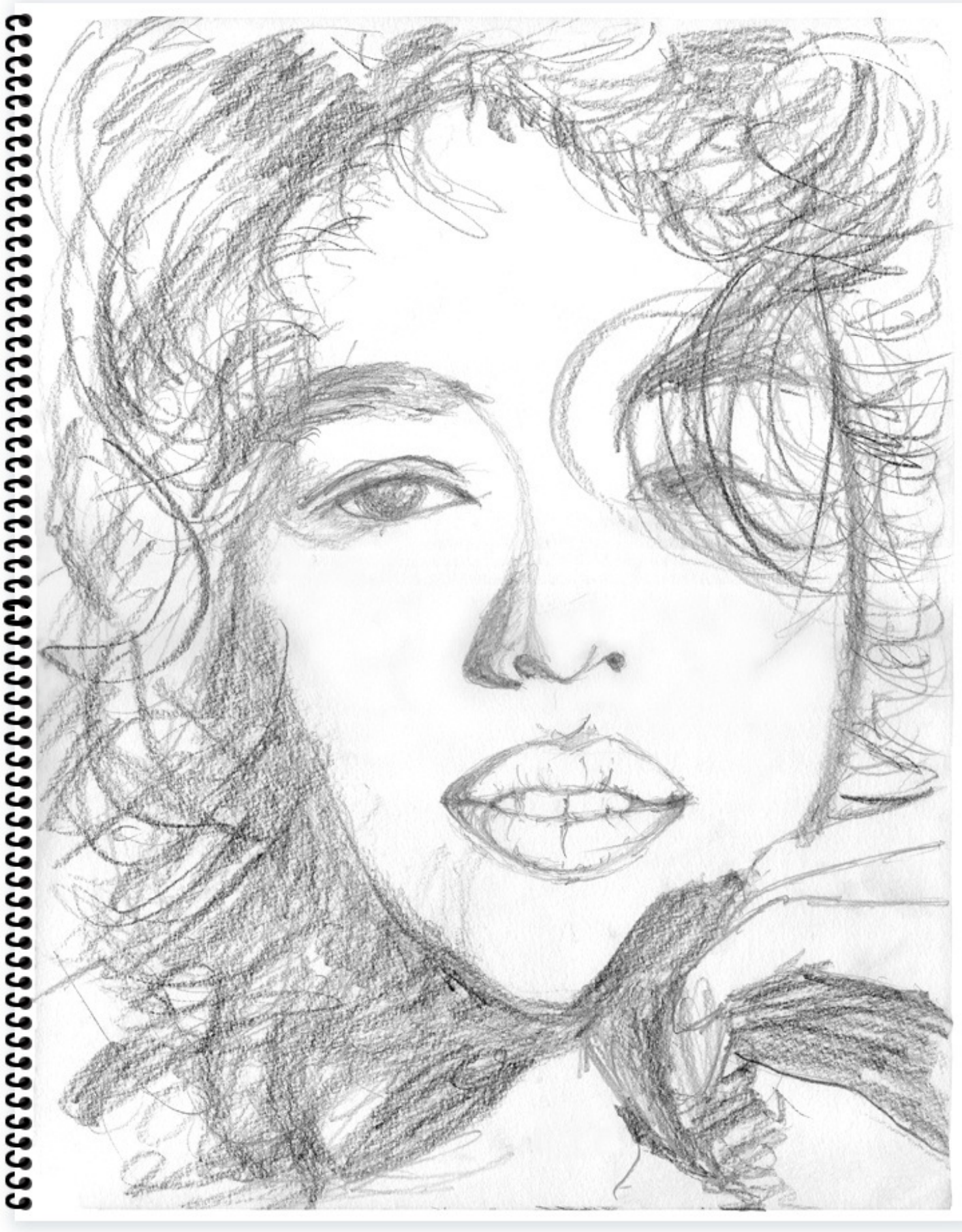
「ベアトリス・ダル」　アクリル　1993年9月2日制作

或る女性

そもそも“練習”といったことが嫌い、
というより苦手であったもので、昔から、
いわゆる“習作”といったものは描いていませんでした。
描こうにも、描けない。“練習”としての絵を、
本当はたくさん描かねばならないと理解はしていながら、
描けない。描こうとすると体中がイーっとなってしまう。
ので、“練習”は“実践”の中に盛り込まれることとなりました。
駄目の典型とも云えます（苦笑）。認めたくはないのですが……。
そんな次第ですから、スケッチブックに描いていた絵も、
“練習”と思って描いていたものではなく、
いつも本気で、対象への愛情に突き動かされるように、
ただ描きたくて描いていたものばかりです。
昔も今も芸能人の女性に恋焦がれます（笑）。
ここからの作品、当時は「シリーズ」として描いた訳ではなく、
タイトルもつけていなかったのですが、収録にあたり、
「或る女性」と統一の命名をいたしました。
特定のモチーフが存在しながら、
今となっては“特定ではない”、
とある女性たちの肖像として御覧いただけたならと思います。
判る方にはピンときてしまうのではと恐縮しつつ……。

「或る女性 1」　鉛筆 1993 年 3 月 29 日制作

「或る女性 2」　色鉛筆　1993 年 4 月 23 日制作



「或る女性 3」　鉛筆　1993 年 8 月 31 日制作

「或る女性 4」　筆、鉛筆　1993 年 11 月 2 日制作

「或る女性 5」　筆、ペン、色鉛筆　1995 年 3 月 19 日制作

「或る女性 6」　ペン、色鉛筆 、アクリル　1994 年 7 月 11 日制作

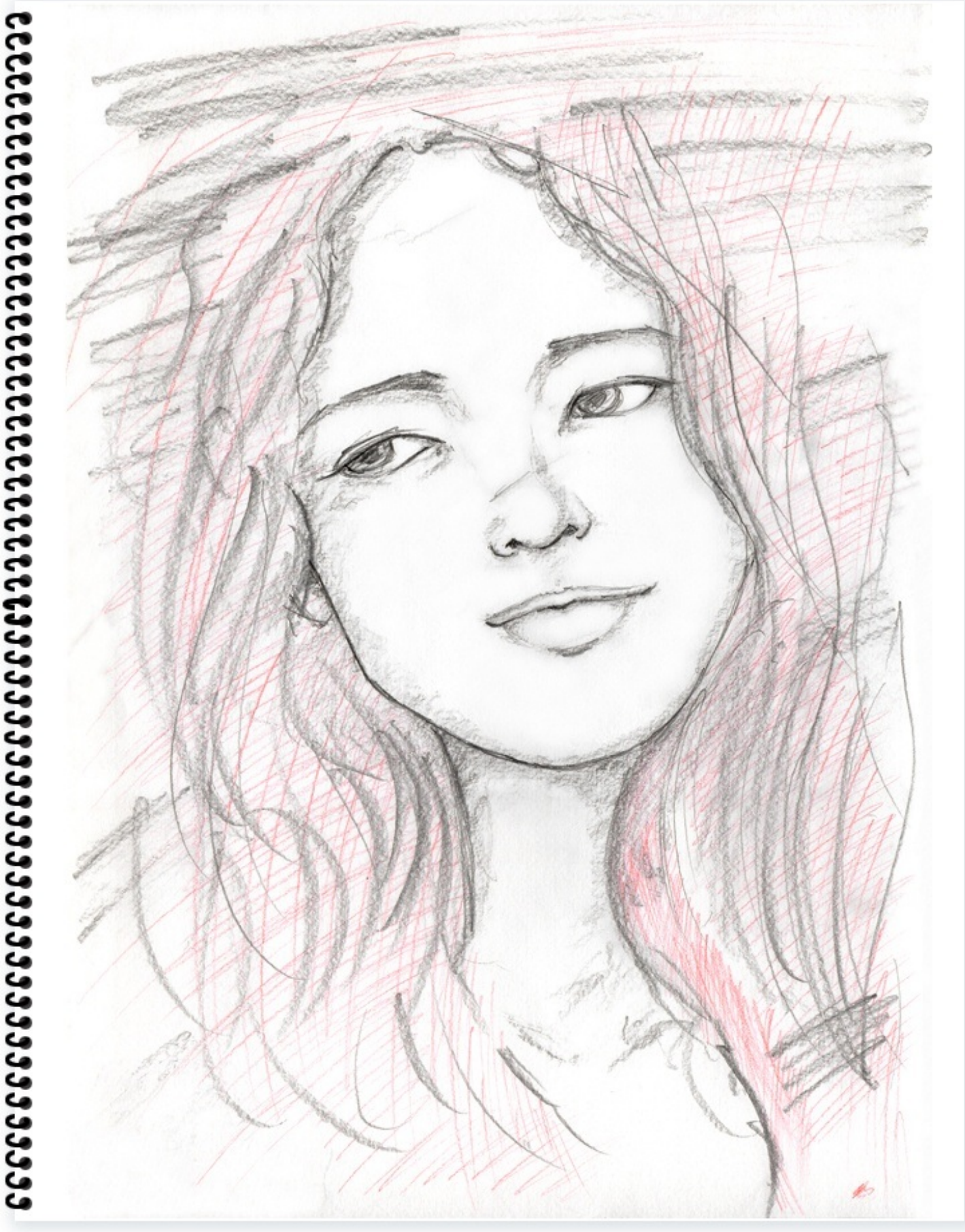
「或る女性 7」　筆、色鉛筆　1994 年 8 月 14 日制作

「或る女性 8」　筆、色鉛筆　1994 年 10 月 18 日制作

「或る女性 9」　筆、水性マーカー、色鉛筆　1996 年 1 月 30 日制作

今回この作品集を編纂するにあたり、
いつもは開くことのない、見返すことも滅多にない、
過去のスケッチブックをひもといたことで、
まるで自分の描いたものではないような、
それでいて確固たる記憶もあるのだけれど（笑）、
とにかく新鮮な気分で作品のいちいちに接することが出来ました。
誰かの描いた新しい作品に出遭うような新鮮さ――。
その最たるものが次に紹介する一枚であり、
この作品集のラストを飾る一枚、でもあります。
正直、惚れました（笑）。
ひと目見て、心がそわそわときめいたり、した（苦笑）。
自分の描いたものなのに、確かにその通りの筈なのに、
全くもって記憶が、ない。本当に全く、覚えがない。
「或る女性」シリーズについては、実を明かせば、
それが誰を描いたものか、大体の見当はついているのです。
……少しばかり、嘘をついたのです（苦笑）。
ですがこの一枚については、本当に何の断片も、ない。
それでいて今現在の自分の、直球ど真ん中な好みの女性、
だったりするのです。驚きです。ハッとするほど、惚れた。
名付けて「誰なんだろう？　心揺らす貴女」。
スケッチブックの最後に描かれた作品、でもあります。

コラム「解説「誰なんだろう？　心揺らす貴女」について」



「誰なんだろう？　心揺らす貴女」　色鉛筆　1998 年 5 月 3 日制作

15
f

ぴょん太堂。

……黙っておれば誰にも知れないことですけど、も。
当初の予定ではこの「作品集」、
２０１１年の７月に刊行するつもりで製作しておりました。
奥付にも“２０１１年６月製作”と記すつもりで、
画像も既に準備してあった……。
それがずるずるずるずると延びに延び、
早や秋の音も聴こうかという季節になってようやっと、
と相成りました理由にはひとえに！
優先すべき他の用事にかまけて手つかずとなっていたゆえ、
つまりゃあまあ、サボっ――――――
……黙っておれば誰にも知れないことですけど、も。
根が正直者なもので、云わずにおれなかった次第……。
はあ～あ、すっきりさっぱりぃ～♪
そんなこんなで、いかがでしたでしょうか？
“惚れ”ていただける一枚など、ございましたでしょうか？
ごくごく個人的な内容ばかりの取り揃えと相成りましたが、
ほんの少しでもお気に召していただけたのなら、
これほどの幸いはございませんです。
最後までのおつきあい、本当にありがとうございました。
次回刊行は「イラスト集」となる予定です。
またの御贔屓、切にお願い申し上げつつ、今回はこれまで。
ぴょん太堂。でございました。

後書き

2011年“ラビット・イヤー” 夏＝6-7-8 制作作品

卯乃京都亭書房。

ぴょん太堂。作品集 『１５ｆ　～昔のスケッチブックから～』

http://p.booklog.jp/book/34062

著者：ぴょん太堂。
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/pyonta-do/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/34062

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/34062

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.